

シンポジウム 「ラディカリズムの条件——窮迫する時代を見据えて」 【趣意書】

2012年の日本社会を特徴づける重要な政治的出来事として、例えば「脱原発」運動を挙げることができるように、2013年のそれとして、「ヘイト・スピーチ」という言葉の流布・一般化を挙げることができるだろう。このことから、日本国内の深刻なレイシズムが問題化されたという積極的な意義を読み取ることも可能だが、一方で、現在もなお、差別的な言辞・行動が途方もないほどの質・量でまかり通っている状況を鑑みれば、「ヘイト・スピーチ」という言葉が市民権を得たことを、単純に評価することは到底できない。むしろ、題名それ自体が「ヘイト・スピーチ」に該当するような書籍が、依然として書店の棚を賑わしているという状況は、言葉の広まりとは裏腹に、日本社会で「ヘイト・スピーチ」の問題性が適切に認識されていないことを、ひいては人種差別の深刻さに対する自覚がまだまだ極めて薄弱であることを、はっきり示していると言えよう。冗談のような話だが、3月に行われたサッカーJリーグの試合で、スタジアム内に「Japanese Only」という垂れ幕が掲げられたことを伝えるYahooニュースのコメント欄のトップに上がっていたのは、「韓国人のような恥ずかしい真似はほしくないでほしい」という表現で、当該行為を非難する趣旨のものだった。

こうした無自覚なレイシズムは、在特会のようなあからさまなレイシズムと一体となり、現代日本のおぞましいほどの排外主義的な空気を作り出している。そして、その排外主義的な空気が、集団的自衛権行使容認に象徴される、安倍政権の軍事大国化への流れを下支えしており、同時に靖国参拝などの安倍首相の「断固たる」態度が、排外主義を後押ししているのも間違いないだろう。戦後の平和運動が築き上げてきた反戦の世論はいまだ根強いとはいえ、日中間での戦争の可能性などといったことが、なかば公然と語られるような状況は異常なまでに危機的である。

もし「ラディカル」であることの定義の一つが、既存の約束事や秩序を根底から否定することであるとすれば、こうした一連の動きは、間違いなく「ラディカル」なものであると言ってよい。安倍首相自身は自らを「保守」と定義しているものの、中島岳志が朝日新聞紙上で指摘している通り（2014年5月13日）、保守とは本来「歴史の風雪に耐えてきた伝統や慣例、良識のような集合知」を尊重しつつ、「極端な変化を退け、漸進的な改革を志向する」ものであり、安倍首相が目指しているものは、そうした志向とは全く反対に、戦後日本においてかろうじて積み重ねられてきた様々な合意を、根底から覆すことに他ならない。「河野談話」の「再検討」などは、そうした姿勢を如実に示すものの一つである。つまり、彼は「保守」というより、むしろ「ラディカル」なのであり、そして、数十年にわたって、仮に形だけであったとしても尊重されてきた、人種差別を否定し、アジアとの友好関係を維

《シンポジウム》
「ラディカリズムの条件——窮迫する時代を見据えて」

持しようとするという態度を真っ向から否定するような、自覚的・非自覚的なレイシズムもまた徹底的に「ラディカル」なのだ。

もちろん、こうした「ラディカリズム」を出現させる土壌が、既に日本に出来上がっていたことは確かである。小林よしのりの『ゴーマニズム宣言』にせよ、かつての小泉純一郎の言動にせよ、それが一定の支持を得ていたのは、間違いなく、その「ラディカル」さに負うところが大きかったし、また、主張自体は異にするものの、そのスタイルにおいて、例えば赤木智弘の「丸山真男をひっぱたきたい」なども共通のものを有している。ただし、現在跋扈している「ラディカリズム」が、こうしたものの単純な拡大として見てよいのかどうかについては、留保が必要であろう。ここ十数年の右派的なポピュリズムの蔓延と、若者を中心とした貧困と隣り合わせの閉塞感との関係などをめぐってなされてきた様々な議論が、現在の、あたかも「たがが外れた」かのごとくに、合意が急激になし崩しにされている状況に対してどの程度有効なのかどうかについては、疑問符をつけざるをえない。

近年の目立った傾向として、何より重大なのが、特定の対象を徹底的に排除しようとする姿勢が、「ラディカリズム」の内部で確実に強まりつつあることだ。生活保護バッシングや外国人排斥の動きなどは、言うまでもなくその顕著な例であり、貧困層や在日外国人といった社会的に弱い立場の人々の権利は、現在、深刻なまでに脅かされている。そればかりか、そうした権利侵害に加担するような暴力的な言説までもが公共空間で大きな力を有するようになり、反対に、正当な権利の回復・擁護を訴えるリベラル・左派的な言説は、攻撃・嘲笑・忌避の対象となり、徐々に社会の片隅へとおいやられているように思えてならない。各地の護憲集会が、「政治的に偏向している」という理由によって公共施設の使用を拒否され、国会前の集会を与党の幹事長が「テロ」と形容し、辺野古の基地反対派のテントは無惨なまでに破壊された。ここで行われているのは、特定の価値や思想を、その存在もろとも否定しようすることに他ならない。「脱原発」運動を、その中心的な担い手が「普通の市民」であることを評価する言説すら、「普通ではない市民」というカテゴリーが存在することを暗に認めてしまっている。社会運動のかつてない規模での盛り上がりとは裏腹に、確固とした信念を持ち、粘り強く運動を続けるような人々は、「普通ではない市民」として、社会から排斥されようとしているのである。

そしてこうした状況の中では、排斥されようとしている当事者たちもが、萎縮し、自らが「普通の市民」であることを証明しようと躍起になってしまう結果、排除がさらに強まるという事態が生まれる。低所得者層が生活保護受給者を非難するというのは、その最もわかりやすい構図の一つであろう。また、2月に行われた都知事選挙に際しての、「左派・リベラル」知識人による、候補者「一本化」への呼びかけにしても、同様の構図の極めてグロテスクな例と言えるかもしれない。「知名度」と単一課題だけを盾に「勝てない」という理由で特定候補の立候補辞退を呼びかけ、ついには「脱原発」以外の問題を「取るに足らない」と言っただけの人々は、ポピュリズム政治を肯定し、本来の民主主義的な価値を否定したばかりか、社会的に困

《シンポジウム》
「ラディカリズムの条件——窮迫する時代を見据えて」

難な状況に置かれた様々な層のニーズをも実質的に排除したのである。そうした排除を生み出す構図そのものを見通すような根源的な社会認識を育て、浸透させることによって、民主主義をより深化させ、排除を根本から克服するという、右派の「ラディカリズム」に対する真の対抗となる筈の、もう一つの「ラディカリズム」は、真っ向から退けられたのだった。

近年、民主主義の限界を唱える議論や、民主主義の見直しを求める主張などが、隆盛を見せている。しかしながら、その見通しは明るいとは言いがたい。「熟議民主主義」は、「普通ではない市民」をたやすく排除できるという弱点を持ち、他方で、「ラディカル」・デモクラシーは、ポピュリズムへの対抗という点で困難を抱えている。また社会主義的民主主義は、民主主義を実質的に失った「社会主義」国家と、少数者が少数者を排除する左翼運動という負の過去を背負い、社会民主主義は「第三の道」という新自由主義のバリエーションにすぎないものを、その履歴に付け加えてしまった。右派的な「ラディカリズム」が、形式的な民主主義の基盤すらをも掘り崩そうとしている現在において、より「ラディカル」な形で民主主義を深化させるという意味での「ラディカリズム」を構想することは、もはや夢物語にすぎないのだろうか。

今大会のシンポジウムで問おうとしているのは、まさしくそうした夢物語のようにはすら見えてしまうような「ラディカリズム」の成立要件とは何かということである。困難かつきわめて広範囲に渡る議論を必要とするテーマであるが、シンポジウムというささやかな場であれ、こうした課題を掲げ、丁寧な議論をしていくことこそ、「ラディカリズム」を実現していく力になると信じたい。発言者として、森千香子氏には、フランスの現状をもふまえつつ、現代日本の反レイシズム運動が直面する課題と困難、そして「排除」の状況について、中谷いづみ氏には、過去の日本で「普通の市民」像が様々に形成されてきた歴史をふまえた上で、現代において「ラディカリズム」の主体を構想する可能性について、そして石井潔氏には、思想的な立場から、「生き残り」のイデオロギーとしてのラディカリズムと社会変革の原理としてのラディカリズムの区別について、それぞれ論じていただく予定である。